



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	A. G. ラーリン著『ロシアにおける中国人移民』
Author(s)	堀江, 典生
Citation	境界研究, 1, 165-170
Issue Date	2010-10-29
DOI	https://doi.org/10.14943/jbr.1.165
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/61320
Type	departmental bulletin paper
File Information	09Horie.pdf



[書 評]

A. G. ラーリン著 『ロシアにおける中国人移民』⁽¹⁾

堀 江 典 生

本書の著者アレクサンドル・ラーリン(Александр Георгиевич Ларин)は、モスクワにあるロシア科学アカデミー極東研究所の主任研究員であり、本書が台湾の蔣経国国際学術交流基金および中国研究センターの助成研究によるものであることからわかるように、彼は台湾を含む中国研究者として知られている。中国人移民問題とラーリンという名前を聞けば、ウラジオストクにあるロシア科学アカデミー極東支部極東諸民族歴史・考古学・民族学研究所のヴィクトル・ラーリン(Виктор Лаврентьевич Ларин)を想起する方も多いと思う。両者とも、中国人移民をロシアの脅威と考える「黄禍論」とは一線を画す冷静な中露関係の観察者であることは共通している。その冷静な視線は、例えば卸売・小売業での中国人のビジネス展開を脅威と見るために実施されたと報道されがちなモスクワのイズマイロヴォ地区にあるチェルキゾフスキー市場の閉鎖についても、政治的な理由というよりは経済的な理由であり、反中国人感情を表したのではないとの発言にもあらわれている⁽²⁾。これがどれほどの事実なのかは分からないにしても、中国人移民問題を脅威として扇動することには無関心で、冷静に分析しようとする良識的な論者である。

本書の構成を見てみよう。大きく分けて、帝政時代からソ連時代までの中国人移民の歴史を概観する第1章、現代ロシアにおける中国人移民の現状を独自の社会学的調査を織り交ぜながら論じている第2章、中国の移民送出のポテンシャル、不法移民取り締まりにも関わる中国人の出国に関する管理政策や労務輸出政策や頭脳流出問題、そしてディアスポラ政策の全体像を概説した第3章に分かれ、最後に結論として第1章から第3章までを短くまとめている。本書は、511ページにも及ぶ大著である。

特に、第2章は本書の最も興味深く、充実した内容となっている。第2章が、本書総ページ数の約4割を占め、この社会学的調査の成果そのものが本書の最大の特徴で

(1) Ларин А. Г. Китайские мигранты в России. М.: Восточная книга, 2009.

(2) Ларин А. Г. Что будет с китайскими гастарбайтерами с Черкизовского рынка? [http://www.lenta.ru/conf/larin/] (2010年5月31日閲覧).

あるといえる。「疑似ディアスポラ」というラーリンの現代中国人移民を捉える鍵概念を提示し、商業人、労働者、学生、旅行者というロシアへの中国人移民を大分類する職業・地位でそれぞれ詳細な現状分析をおこなっている。これらの職業・地位のなかで、特に商業人と学生については大規模な社会学的調査を行い、その結果を軸に分析を行っている。さらに中国人に関わる不法移民問題を不法入国や資格外活動の観点から論じ、両国の不法移民対策に関する協力関係を論じている。ロシアの人口減少問題については中国人および中国人労働者を補充移民とすることに反対し、安易な移民大国化に警告を発している。ロシアが移民大国化するのは時期尚早としつつも、そのための4つの条件を提示するなど、興味深い内容となっている。また、中露関係に関する住民意識調査を行い、中露関係発展へのロシア住民の肯定的な態度は確認できるものの、中国からの移民および出稼ぎ労働者の受入の準備ができていないことを論じている。

本書の特色を挙げてみよう。まず、第1に、豊富な中露両国の文献をサーベイし、中国移民問題を歴史的に概観しつつ、総括的に描き挙げている点である。第2に、現代の中国人移民を主に定住移民ではなく短期滞在型の移民としながらも、中国人コミュニティを通じてディアスポラ的活動を事実上行う疑似ディアスポラ(квазидиаспора)として描いている点、第3に、これまでロシアで行われた中国人移民に対するアンケート調査の規模としては最大級の本格的な社会学的調査を実施し、その成果を生かしている点、である。

本書で行われた中国人移民のアンケート調査は、商業者700人と学生200人を対象とした900人の大規模な調査であった。900人のうち、半数をモスクワ市において、半数をロシア極東地域の都市(ウラジオストク市、ハバロフスク市、ブラゴヴェシチェンスク市)において行っている。サンプル数だけが本書の調査の特徴ではない。そうした大規模なモニタリングを行う際に、本書で行われた調査は、ロシアにおいて著名な世論調査機関「全ロシア世論調査センター (ВЦИОМ)」を通じて組織的行った点が、これまでの個々の研究者・共同研究者の努力によって行われてきた中国人移民モニタリングとの違いを際だたせている。また、近年のロシア移民研究において就学を目的とした移民への関心が高まっているが、すでにゲリプラスも同様の社会学的調査を行っているとはいえ、その潮流に合わせて中国人学生に対する社会学的調査を行っているところも注目すべきところであろう。

さて、これらの特徴をもつ総括的で本格的な中国人移民研究の成果である点で、評者はアレクサンドル・ラーリンの労作に敬意を表したい。中国人移民問題を知ろうとする者にとって、ロシアの研究状況を知る上で、そしてこれまでの中国人移民研究の軌跡を知る上で、本書は欠かせない参照文献になるに違いない。それでも敢えて本書

の問題点を挙げることは、今後の我が国のロシアにおける中国人移民研究を展開していくためにも、決して無駄ではないだろう。

「疑似ディアスポラ」論は、本書の基本分析視角である。ディアスポラは、現在では多様な定義で論じられるが、基本は異国での定住・定着を前提とした定義であり、短期滞在型(出稼ぎ型)中国人移民ならば彼らをディアスポラと呼ぶことはできない。それはラーリン自身も十分に理解しているし、だからこそ「疑似」と形容した。しかし、中国人移民達が中国人コミュニティを通じて活動している現状をとらえて、「疑似ディアスポラ」と呼ぶことで何か新しい事実がロシアにおける中国人移民研究においてうかがいあがってきたわけでない。「ディアスポラ」という言葉の代わりに「同郷人組織」をそうした中国人コミュニティの分析に利用したゲリブラスの労作⁽³⁾では、ディアスポラ、共同体(община)、同郷人組織(землячество)を区別し、中国人移民の分析視角として「同郷人組織」を採用している。ディアスポラ、共同体、同郷人組織は、ロシア語ではしばしば同義語として扱われてきただけに、ゲリブラスはこの3つの峻別により中国人移民分析に新たな境地を見いだした。ラーリンはロシアに短期滞在でビジネスを行う中国人を疑似ディアスポラと呼ぶことで自らの視角を特徴づけるのであれば、やはり、ゲリブラスの同郷人組織論との違いを明確にしなければならない。本書の核心となる概念であり、ゲリブラスの研究をよく知るラーリンであるがゆえに、「疑似」ディアスポラ論と同郷人組織論との違いを明確にできなかったことは残念である。

本書で行われた社会学的調査は興味深いが、調査方法についての詳細が論じられていない。男女比6対4という構成も少し女性の比率が高めの設定であるように思われる。おおよそロシアの外国人労働者の男女比は男性85%である。なぜこのような結果となったのかの説明もない。「全ロシア世論調査センター (ВЦИОМ)」による調査を行うことで、これまでとは異なってどのような方法論的特質があるのかなど、説明が欲しいところである。

本書の社会学的調査が従来の社会学的調査と比べ新たな発見を提示しているかどうか、読者にとって大きな関心事となる。もちろん、ゲリブラスなどが行ってきた社会学的調査にはなかった質問事項も多く含まれている。行政・法制上の困難に関する質問では、行政職員の強請やたかりに対する不満が多いことなど、社会学的調査で明証している。また、ビジネス環境やビジネス・パートナーとの関係など、興味深い質問事項も多い。ところが、ラーリンの調査は、ゲリブラスが自身の社会学的調査で結

(3) Гельбрас В. Г. Китайская реальность России, М., 2001; Гельбрас В. Г. Россия в условиях глобальной китайской миграции, М., 2004; および、ヴィリヤ・ゲリブラス「ロシアにおける中国人の同郷人組織とマイグレーション」大津定美編『北東アジアにおける国際労働力移動と地域経済開発』ミネルヴァ書房、2005年、を参照されたい。

論づけた方向性を大きく変えてはいない。たびたびこの書評においてゲリブラスというロシアにおける中国人移民研究の優れた到達点と比較することを不公平と思われる方もいるかもしれない。しかし、ラーリンの社会学的調査は、質問項目もゲリブラスの行った調査と共通するものが多く、その分析の仕方もよく似ており、ゲリブラスの社会学的調査を意識したものであることは、ゲリブラスの著作と本書を併せ読めば容易に想像できるだろう。ゲリブラスが示した「ロシアの中国人の本当の姿(Китайская реальность России)」に対してどのような新しい視点を提供できるかは、同じ社会学的調査を行う研究としては欠かせないチェックポイントとなる。

近年のロシアにおける中国人移民研究の傾向とは異なる結論も出されているが、その実証は十分とは言えない。例えば、ラーリンは中国人移民大多数の収入は「十分にささやか」であり、ロシアの平均賃金相当であり、ロシア人から食い扶持を奪うという外国人恐怖症の論説は神話であるとしている(本書174頁)。この評価はこの社会学的調査からは見えにくい。ラーリンの調査では、5,000ルーブル未満の収入および5,000ルーブル以上2万ルーブル未満の収入という回答に82%もの回答が集中している。5,000ルーブルは、当時の公式レートが24.55ルーブル／ドルであることをから、約200ドル程度であり、2万ルーブルは約815ドルである。公式統計では、この社会学的調査と同じ2007年のロシアの月平均収入は12,602ルーブル(約513ドル)、平均賃金は13,593ルーブル(554ドル)であることから、ロシアの労働市場にとって中国人の収入が高いのか低いのかは見えないのである。モスクワ市の平均賃金は23,623ルーブル(約962ドル)、沿海地方の平均賃金が13,174ルーブル(約537ドル)であり、2万ルーブル近く稼ぐ中国人労働者は、モスクワでは平均賃金ぐらゐの収入を得ており、沿海地方ではそれなりの収入を得ているとの評価になる。ラーリンは、自らのこの所得水準の調査結果を黒竜江省でウィッシュニクが行った調査結果と近似であるとしているが⁽⁴⁾、黒竜江省出身の中国人は、ラーリンが示すようにモスクワでは中国人移民の一角に過ぎないが、ロシア極東地域では8割を占める。黒竜江省出身の中国人労働者が2万ルーブル近く稼いでいるとしたら、それは十分な収入を得ているとロシアの労働市場で評価できるだろう。地域別により細分化した回答を用意しなければ、ロシア労働市場における中国人移民の収入の評価はできない。リヤザンツェフとヤンによる同様の社会学的調査(2006年モスクワ市在住120人の中国人に対する調査)では、700-800米ドルの収入と答えた中国人移民が30%に及び、それ以上の収入を得ている中国人移民36.7%を加えると大半の中国人移民が「悪くない収入」を得ている、と評価し

(4) ちなみにウィッシュニクも、中国人労働者たちの収入を低いとは論じていない。逆に中国人にとってかなり高額の所得を得ていると論じている。エリザベス・ウィッシュニク「移住と経済安全保障：ロシア極東の中国人労働移民」赤羽恒雄、アンナ・ワシリエバ編『国境を越える人々：北東アジアにおける人口移動』国際書院、2006年、94頁。

ている⁽⁵⁾。ゲリブラスもロシアの中国人移民は十分に裕福であるとの評価を与えている⁽⁶⁾。外国人労働市場においてどのような階層化が生じているのか、ロシアの労働市場の底辺で働いていると言われる中央アジアからの労働移民たち⁽⁷⁾と合わせて興味深い点であるが、ラーリンの調査結果はゲリブラスやリャザンツェフらの評価を覆すこともできなければ、新鮮な情報を与えているわけでもない。

第3章の中国の対外移民政策やディアスポラ政策は、中国通の研究者として中国の基本的な政策を論じてはいるものの、肝心のロシアへの労働力輸出に関わる諸政策に関しては突っ込んだ議論をしていない。中国移民政策の概説になっている点は、残念である。

さて、最後に再び疑似ディアスポラ論に戻りたい。というのもロシアのマスコミや一部研究者は、短期滞在者を含め中国人をディアスポラとして描くことがしばしばあるからである。それゆえ、ディアスポラの要素を中国人商人や労働者に見いだそうとする動機がロシアにおいては強く、ロシアにおける中国人移民論の特異な傾向であり、本書の疑似ディアスポラ論も決して例外ではないように思えるからである。評者は、しばしばロシアの移民研究者の一部やマスメディアが中国人移民問題についてディアスポラという枠組みで論じようとする傾向に違和感を感じる。好況には労働市場に招き入れられ、不況では労働市場から放逐され、ロシアの経済的緩衝材となっている中央アジア移民たちとは異なり、中国人労働者たち、特に本書で特に分析対象となった商業分野の中国人達は、市場で不況や競争相手と戦う商売人である。彼らにとって移民の重要な側面は、中国の国民文化からロシアの国民文化への変化ではなく、ビジネスチャンスがあれば赴き、ロシアにおいても我が家のようにくつろぐことのできるハビトゥスを持ち、日常的な国境の往来を厭わず、自国の製品を売りさばく商売人としての活動である。定住・定着とディアスポラ意識(それを育てる民族教育も含む)を持たないがために、ゲリブラスはロシアの中国人やベトナム人や北朝鮮人に対しディアスポラという用語の適用を避けた⁽⁸⁾。ラーリンは華僑など東南アジアの中国人ディアスポラをよく知っており、にわかディアスポラ論者ではない。しかし、安易に中国人移民達をディアスポラ扱いするマスメディアや一部の研究者同様に、「疑似ディアスポラ」論がその独自の論理から明らかにする事実は多いとは思えない。

こうした問題点を指摘しているが、そのことが本書の魅力を著しく削ぐわけではない。

(5) Рязанцев С., Ян Х. Китайская миграция в Россию: Тенденции, последствия и подходы к регулированию, М., 2010, С. 78.

(6) Гельбрас. Китайская реальность России (前注3参照), С. 83.

(7) ちなみに、モスクワの中央アジアからの労働移民たちの収入は500ドル程度であるとされている。堀江典生、セルゲイ・リャザンツェフ「モスクワの中央アジア移民：移民の語りから構築する中央アジア移民像」堀江典生編著『現代中央アジア・ロシア移民論』ミネルヴァ書房、2010年、154-155頁。

(8) Гельбрас. Россия в условиях глобальной китайской миграции (前注3参照), С. 43-44.

本書は、ロシアの中国人移民問題の研究書として優れていることに疑いはない。本書の取り上げる諸論点が、ロシアの中国人移民問題の最も検討すべき論点を数多く含んでいるがゆえに、多くの疑問を呈したくなる。だからこそ、本書はロシアの中国人移民論を読み解く上で重要な文献であるのだ。本書を読めば、ロシアの中国人移民研究を行う者は、本書を参照せずにはいられないことに気がつく。網羅されたロシアの中国人移民研究の文献や過去の社会学的調査との接点は、豊かな議論の題材を私たちに与えてくれる。